

「明治開化期におけるマーガレット・グリフィスの役割」

——啓蒙的女子教育の実態解明への手がかりとして——

碓 井 知 鶴 子

The Role of Margaret Griffis in Women's
Education during the Meiji Period in Japan

Chizuko Usui

—はじめに—

マーガレット・C・グリフィス Margaret Clark Griffis (1838-1913) は、明治5年(1872)8月10日に来日し、同7年(1874)7月18日に離日したが、2年間の滞在期間中、1年4カ月を、明治新政府の設立した女学校(官立東京女学校、通称竹橋女学校)で英語教師として働いた。明治政府のお雇い外国婦人として、ヴィーダ夫人 Mrs. Peter V. Veeder (東京女学校の最初の英語教師) や、クララ・ライス Clara A. Rice (マーガレットの同女学校における後任者) らと共に、学制期の開明的女子教育政策を実践した人物として位置づけられる⁽¹⁾。

マーガレット(以下、当時の通称に従い、マギーと略記)が弟のウィリアム・グリフィス William Elliot Griffis の要請によって来日した経過については、E. Beauchamp の研究が示すように、W. E. グリフィス自身の、母の死によるホームシック、失恋の痛手、経済的困難などの事情があり、それを乗り切るためにも東京でマギーが教師として働き口を見つける可能性のあることを手紙で訴え、結局マギーがこれを了承して来日したのである⁽²⁾。

従来グリフィス研究で明らかのように、W. E. グリフィスは、早くもラトガース大学在学中の1869年に、女子にも高等教育の門戸が開かれるべきだとの演説をしているが、ラトガース大でこれが実現するのは1918年になってからであり、彼のキリスト教的博愛精神にもとづいた女子高等教育の擁護は、彼の母の影響⁽³⁾ 又は、幼児期の教育を重視する考えからきていると指摘されている⁽⁴⁾。このような考え方をもつ弟を、マギーは理解し、物心両面にわたって支持し、有能な補助者としての役割を果たしてきたことは諸研究の認めるところである。

しかるに彼女の教えた官立東京女学校（明治5年2月開設，同10年2月経費節減のため廃校，生徒は，東京女子師範学校に特別英学科を設けて収容，明治11年これを別科と称し在学生の卒業と共に翌12年に廃止）は近代女子教育の出発点において政府が示した啓蒙的，進歩的，革新的態度を具現するものとして女子教育史上，高く評価されている⁽⁵⁾。したがって，この女学校で教えた最初のお雇い外国女教師の一人として，マギーの残した滞日中の手紙や日記及び女生徒の英作文⁽⁶⁾などを検討することは，創設期の官立東京女学校の実態を解明する上で貴重な手がかりを与えてくれるであろう。

今回の報告は，上に述べた視点に立って，マギーの日記，手紙，雑誌投稿記事及び女生徒の日記など主としてグリフィス・コレクション（以下 GCRUL と記す）による資料に依拠しつつ，W. E. グリフィスの補助者としてのマギーではなく，わが国の学制期の開明的女子教育に立ち会った教師としてのマギーに焦点をあててみたい。

I 日本でみられるマギーについての資料

(1) 公式書類

太政類典第二編には，マギーの東京女学校雇入れに関して以下のように記載されている。

グリフィス〔マーギ〕，〔年齢〕6年当時28才，〔原綴〕Griffis, Maggie, 〔国籍〕米，〔雇入場所〕東京（居留中雇入），〔雇主，雇期間〕第一大学区東京女学校（6年3月1日—8月31日，雇継6年9月1日—7年2月28日，7年3月1日より6ヶ月雇継），〔職種〕教師，英語学，〔給料〕月給50円，6年9月1日より110円，7年4月より150円，〔備考〕グリフィス姉，1日3時間授業，6年9月1日より1日6時間，満期賞与として代金50円を授与，〔住所〕開成学校構内宿舎⁽⁷⁾

上記記載の中で雇入時（明治6年）の年齢が28才となっているが，実際には35才であり誤りがある。

(2) 田中不二麿による満期表彰

明治7年7月，満期賞与として文部大輔田中不二麿より50円授与されたことは上記の公式書類にも記されているが，その際の田中のマギーに対する惜別の言葉が当時の新聞記事に残されている。

「東京女学校校師ノ任ヲ以テ貴所ニ託スルコト茲ニ日アリ，今定約ノ期將ニ満タントス，是ニ於テ僕当省ニ代ツテ，貴所品行ノ高キ，才芸ノ優ナルヲ表セント欲ス。蓋シ貴所ノ職ニ任ズルヤ，其初ニ難苦ナリシモ能ク之ヲ盡スニ当リ遂ニ生徒ノ敬愛ト官吏ノ信用トヲ得ルニ至リシハ，単ニ貴所ノ勉力ニ依ル所ナリ，而シテ此校教育進歩ノ為メ，誠実ニ誘掖セラレシハ後來婦女教育ヲ以テ心トスル者ノ感荷ニ堪ヘザル所ナリ。因テ貴所ノ功ヲ讚賞スルノ證トシ

テ、聊カ別紙ノ品ヲ呈ス、伏テ領収ヲ乞フ。

エム、グリフィス婦貴所

(目録) 1 金50円」⁽⁸⁾

田中は、上記のようにマギーの品行と才芸を高く評価し、東京女学校の教育進歩に誠実につくした功を賞めているが、「生徒ノ敬愛ト官吏ノ信用トヲ得ルニ至リシ」の言葉はマギーにぴったり当てはまり、単なる儀礼的謝辞を越えている。

(3) 『高橋是清自伝』の中でのマギー

開成学校の生徒時代の高橋是清(1854-1936, 財政家, 政治家。原敬の暗殺後一時, 首相, 政友会総裁)は W. E. グリフィスから1カ月10円の報酬で翻訳を手伝っていた。高橋が翻訳するのをグリフィスが筆記するという方法をとっていたが、その中でも一番時間を費したのが、『膝栗毛』であった。

「私が翻訳する時、グリフィス先生の側にはいつも妹さん(後で一橋学校の先生になった人)がおって、話を聞いておられたが、何しろ弥次郎兵衛、喜多八の五十三次であるから、随分卑猥な言葉もあるし妹さんの前で話しにくいこともある。そのたびごとに、妹さんに別室に出てもらって翻訳をしたような次第であった。」⁽⁹⁾

高橋はマギーをグリフィスの姉でなく妹であると記し、東京女学校を一橋学校と述べているなど誤認があるが、マギーが弟の日本文化への関心を共有しようとした日常生活の一端をかいま見ることができる。

(4) 鳩山春子著の『自叙伝』の中のマギー

鳩山春子(1861-1938, 女子教育家, 鳩山和夫と結婚)は明治7年4月に信州松本から上京して東京女学校に入学し、マギーの後任のクララ・ライス(明治7年9月から同10年2月まで雇わる。夫の Geo. E. Rice は明治15年に横浜で米国の副領事になる)⁽¹⁰⁾に学んでいる。

「この女学校の良くなったのは偏に英語の先生ライスさんの教授法が上手で、非常に勉強を奨励したからでありました。その前のグリフスという先生の時分には生徒は余り勉強しなかった。尤も三年も経った後、私がライスさんに就いて英語を始め、その上級の人々に追附いた位ですから、グリフス先生は単に生徒を甘く可愛がった許りであったのかも知れません。ライス先生は実に厳しう御座いました。ちょっと余談などを互にしても室外に出されたものです。」⁽¹¹⁾

鳩山が入学したのは明治7年4月であり、その3カ月後にマギーが離日しているため、直接の接触があったふうには見えない。事実大正8年に鳩山はワイコフ夫人に、自分が東京女学校に入学した時には既にマギーが帰国してしまっていたと告げている⁽¹²⁾。これは明らかに鳩山の記憶違いであるが、二人が人格的接触を持たなかったことを示している。いずれにしろ、マ

ギーが生徒を可愛がったらしいこと、実力養成派の厳格な教師タイプではなかったことなどが推察できよう。

(5) 「文部省年報」について

マギーの働いた東京女学校の制度的側面（規則、学科目、教員数、生徒数、教科書名など）については、「文部省第一年報」～「第五年報」に記載されている。マギーのいた明治6～7年の時期を「第一年報」及び「第二年報」によって概略する。

文部省は、明治4年12月に「女学校入門之心得」を布達し、明治5年2月より開校すること、学校の体裁は尋常小学科に英語学を加え、小学科は日本人教師が教え、英語は外国人女教師が教えること、又、英語に習熟する女生徒に通訳をさせることとしている。後述するように通訳をした女生徒は赤井よね（後の吉原重俊日本銀行総裁夫人）であった。また明治6年2月10日の文部省布達では、この女学校が、女教師と通弁の養成を将来の目的とするとし、普通女子小学校とは異なるものであることが明確化されている。さらに『第二年報』では、小学、英語、手芸の三科を兼ねて女子教育の方法とするとした。生徒数は、明治6年度が38名、教員は日本人6名、外国人1名、同7年度は生徒数が78名に増加したが教員数は同じであった。生徒の年齢は8才から15才までであったが、マギーが明治7年7月に帰国した翌8年になってから諸規則が改定され、14才以上17才以下となり中等教育機関の性格が確定している。マギー在任中は制度的側面においても初等教育と中等教育の混在がみられたのである。尚、マギー在任期間中に用いられた英語の教科書には、ウィルソンリーダー、ユニオンリーダー、フレエスブック、クェッケンブス文法書、ウィルソンスペリングなどがあつた。

II マギーの日記と手紙からみた教師生活

(1) マギーの生涯の概略

マギーの受けた教育を、アメリカの R. Carrol による先行研究⁽¹³⁾によって、まず紹介したい。

マギーは、フィラデルフィアの石炭業を営む富裕な実業家を父とし、敬虔なキリスト教信者を母として少女期を上流階級にふさわしい教育をうけた。音楽、裁縫、読み方と若干の知的教科を、パットン牧師夫妻の経営する女学校 (school for young ladies) で学んだ。

性格は真面目で生来メランコリックで勉強熱心であり、フランス語、ドイツ語、ラテン語を学び、特に音楽を好んだ。読書もよくしており、20才から21才頃の日記ではシラー、プルターク、ストウ夫人、スコット、クーパー、アーヴィング、ヘンリージェームスなどを読んでいる。⁽¹⁴⁾しかし1857年の経済不況と父親の事業の失敗で一家は経済的困窮に落ち入り、弟ウィリーは高等学校を中退して就職し、マギーは、1857年以降、家庭教師として、数カ月単位で各

地に働きに出ている。以下その主なものを年代順にあげてみよう。

〔1857年—1858年10月〕 テネシー州，ティプトンヴィルの近くのメリウェザープランテーションでイズラー家の3人の子の家庭教師となる。

〔1859年11月—1860年3月〕 ヴァージニア州，ベンウィルで，ロビンソン家にて2人の子を教える。

〔1861年1月—1861年4月〕 ワシントン D.C. 近くのサニーサイドで A. アディソン家の5人の子供を教える。

〔1864年11月—1865年9月〕 フィラデルフィアのソリス家で教える。

〔1865年11月から数年間〕 フィラデルフィアのミッチェル家で教える。

〔1869年6月—1869年9月〕 弟ウィリーとヨーロッパ旅行。

〔1871年—1872年〕 グリフィス家に寄寓の手島精一に教える。

〔1872年8月—1874年7月〕 来日，東京女学校で教える。

〔1876年—1898年〕 フィラデルフィアの私立女学校 (Miss Judkin's school for girls) にて教える。⁽¹⁵⁾

以上の概略が示すように，マギーは19才の時から断続的に家庭教師として働き，家族の生活を助け，日本に来た時には，15年間のキャリアを積んでいたことがわかる。又，帰国後は，明治9年から同31年まで22年間にわたって女学校教師としての後半生を送った。マギーの学歴は，女学校卒であり，当時の上流階層の子女にふさわしい教養（アコムプリッシュメント）を受けたに過ぎないが，以後の独学でフランス語，ドイツ語，イタリア語，英米文学，歴史，音楽など広い知性を身につけた。当時，フィラデルフィアには「女子ハイスクール師範学校」（1848年創立）があり，東部には女子セミナリーもあって教員養成をしていたが，中産階級の子女が入学していた。また，女子カレッジも南北戦争前にパッサー（ニューヨーク州）など若干設立されはじめたばかりであった。マギーの少女期には女子の高等教育はまだ市民権を得ていなかったのである。

（2） 来日後の東京女学校関連の日記と手紙

① 就職探しとヴィーダー夫人の協力

明治5年8月に来日したマギーは同年秋から教師として働く場所を探す努力をしている。当時は弟ウィリーの教科書作りの手伝いをしていたが，それだけでは満足できない気持ちを妹への手紙で次のように訴えている。

「私はウィリーの手伝いを喜んでしているが，自分の力で働きたいのです。誰にも依存したくないのです。そしてあなたたちに送金したいのです。」⁽¹⁶⁾

このような彼女の相談相手になったのが，フルベッキ夫人とヴィーダー夫人であった。

「ミセス・フルベッキが先程訪れて，明日一緒に馬に乗ることを約束しました。彼女と時間

をかけて学校について話しました。彼女のいうには日本での女子教育熱はすでに衰退したようにみえること、それに日本人は無料で教えてもらいたがるそうです。私はプライベートスクールを開きたかったけれど、生徒が見つからないので教えることもできず仕事なしの状態に甘んじなければならないのです。」⁽¹⁷⁾

ヴィーダー夫人は、明治5年2月の開校以来女学校で教えていたが、マギーに同情していたようである。

「ミセス・ヴィーダーはとても親切で私のためならどんなことでもしてくれます。」⁽¹⁸⁾と彼女を信頼していることを書き送っている。ヴィーダー夫人がマギーに東京女学校での代教を頼んだのもこの時期である。

「ミセス・ヴィーダーが横浜に行く用事があったので2日間、彼女の代りに教えました。学校はちょうどマーサ（妹）の教えている学校に似ていて生徒たちは7才から17才にわたり、スペリングしかできない子もいれば簡単な本を読める子もいます。ミセス・ヴィーダーは、通訳を通して教えていて生徒数は約50名程で、午前中は半数に分れて英語と日本語の授業があり、午後はその逆になります。女生徒たちはとても興味深くて男子生徒のレベルに劣らず、行儀がよくて教える上で困るようなことはなにも起りません」。⁽¹⁹⁾

「文部省年報」には、初年度38名と記録されていることは既にのべたが、マギーは50名程と記している。このように、来日2カ月後にヴィーダー夫人のクラスを2日間教えた彼女は、翌明治6年2月に、正式に教師となるチャンスを得た。

「昨晚、フルベッキ氏が女学校の教師の仕事を持ってきてくれた。一カ月50ドルで一日に二時間半教えるのだ。今日その返事をする事になっている。日本政府はこの女学校の廃止を意図していたが、最終的には続けることに決め、二人の外国人が二時間半ずつ受けもつことになった」。⁽²⁰⁾

ヴィーダー夫人が一人でしていた仕事をマギーと分け持ったということであり、従ってヴィーダー夫人の月給は、明治6年3月から、それまでの100円が60円に減じ、さらに同6年8月には満期解雇となっている⁽²¹⁾。マギーがそれに代って同6年9月から1日6時間に増え、月給も110円に増えたことは既述のとおりである。

なお上記の記述で注目したいのは、政府が開校して、一年を経た女学校の廃止を検討していたということである。日本でこれを裏づける資料を筆者はまだ見出していないが、女子学校の模範となることを期待する文部省の開明的姿勢に懐疑的、ないしは反対の一派が既に明治6年の段階で存在していたことを暗示している。

② 教師として

契約は、明治6年3月1日からであったが実際に教えはじめたのは3月3日であった。3月8日の日記によると、午前中をヴィーダー夫人が教え、午後にマギーが2クラスを受け持ったが、それぞれ16人と6人の生徒がおり、授業はとても調子よくいったとある。先にふれたよう

にマギーはヴィーダー夫人の代りに授業を受け持ったこともあり、生徒とも既に顔なじみになっていたのであろう。明治6年1月にいとこのヘティ Hettie にあてた手紙は、彼女が女生徒の社会的階層などを理解し、心のつながりもできてきたようすがうかがわれる。

「官立の女学校に通う生徒は上流階層の子女でお供をつれて人力車で通学しています。彼女たちはとても美しく楽しくそれに非常に丁寧です。私は彼女たちに会うためによく学校へ行きます。」⁽²²⁾

正式に雇われてからしばらくの間は学校の方が忙しいのか、大好きな外出もあまりしていない。「今週はずっと忙しくてあまり外出もしていない」⁽²³⁾ という日がみられる。

3月の末、マギーは契約書にサインをしようとして日付けのミスに気がつく。

「昨日、私の契約書が持ってこられたが、契約期間が一年になっていたので署名をしなかった。松隈氏⁽²⁴⁾ がフルベッキ氏のところへ相談に行き私も一緒に行って話しあい、6カ月の契約書をあらたにつくることになった。」⁽²⁵⁾

明治6年7月12日の日記には、来日したばかりの D. マレーが、岩倉具定らと一緒に学校を訪れたこと、そして一緒に食事したことが記されている。同年9月からは、ヴィーダー夫人が退職してマギーの時間数がふえるが、日記には簡単に、「今週は一日5時間教えて学校が忙しかった」(明治6年9月4日)と記している。契約上は一日6時間となっているがこれは5時間の授業と一時間の昼休みで合計6時間ということであろう。同6年9月26日には、大雨の降った同月23日のことを記し、7人の生徒しか来ず、2時間で授業をやめて帰ったとある。又、この週には晴天が一日だけしかなかったが、その日、写真を一年クラスの生徒、ウィリー、赤井と一緒にとったことも記しており、生徒と一緒に写真をフィラデルフィアの留守宅に送っている。⁽²⁶⁾

同年11月に入ると、D. マレー夫人とミス・クロスビー(横浜共立女学校)が学校を訪れている。ミス・クロスビーはミセス・プリュインやミセス・ピアソンと共に明治4年にアメリカン・ミッション・ホームを開いているが、マギーはこの学園を訪問して感銘を受けており、日記にはこれら三人の婦人宣教師との交流が各所に記されている。宗教的関心の深いマギーは、後述のように、ミッション・ホームでは、日曜学校が、学校の建物内で行われていることにも感銘を受けているが、官立の女学校と対比して宗教教育が自由に行われていることに関心を持ったのであろう。

森有礼が宣教師 J. H. バラと共に女学校を訪れたのは、同年11月15日であると日記にある。アメリカから帰国当初には女学校設立計画⁽²⁷⁾を構想していた森は、国内の女子教育に関心を持ち、芝山内の開拓使女学校にもよく足を運び、ワシントンがその母と対話している絵と、リンカーンの肖像とを贈ったといわれているが⁽²⁸⁾、その森が東京女学校に関心を抱いたことはうなづけよう。

明治6年11月29日には、女学校に皇后が訪問された。マギーはこの日のことが強く印象に残

つたらしく、めずらしく詳細にわたって記している。

「今朝、皇后が開成学校にこられ、すべての外国婦人が招待された。そのあと私たちの学校を訪問されたが、生徒たちは美しく正装し、マレー教授、杉浦⁽²⁹⁾、田中不二麿などが随行してきてきた。皇后は、緋色の袴をつけ髪はおすべらかしにし、外国製の靴をはいていた。彼女の動作はかたくて、左右に顔を動かさなかった。女生徒たちは英語と日本語の読み書きをし、田中不二麿から賞められた。約10名の優秀な生徒が前にならんで表彰された。生徒は全部外へ出てお見送りをした。すべてはとても美しく行われた。」⁽³⁰⁾

この日に表彰された15名の女生徒名は、当時の新聞にも出ており⁽³¹⁾、これらの女生徒のうち8名は、英文エッセイ *History of My Life* が GCRUL に残存していて、女生徒の社会階層や生活史などの追跡調査を可能にしている⁽³²⁾。マギーの日記に度々登場する青木琴や阪本甲子も15名の中に名前が見出されるし、マギーの日記には登場しないが、渋沢栄一の娘の渋沢ウタ（穂積歌子、穂積陳重と結婚）の名も見出される。マギーがこの日の日記に女生徒たちは英語と日本語で読み書きをしたと記しているが、このうち英語は誰が暗誦したのか不明であるが、日本語を暗誦したのは渋沢ウタであった。ウタの伝記には、次のように記されている。

「明治6年の11月29日に、皇后陛下（昭憲皇太后陛下）が、はじめて此の学校に行啓あらせられ、女生徒の学習の有様を御覧になりました。さうして、一同に、「西国立志篇」という其頃新刊の書物を一部つつ、又、年長で英語の出来るものには、小形の英語辞書を添へて御下賜になりました。其の時歌子は、陛下の前で、瓜生氏著「日本国盡」といふ本の中の、近江八景の一節を暗誦いたしました」。⁽³³⁾

「西国立志篇」は、「学問のすすめ」と共に当時この女学校の教科書としても使われており、開明的側面を示している。

さて、明治7年に入ってからマギーの日記には、自宅に女生徒を招いてもてなすことが数多く記されているので、以下、関連する主な個所を抜き書きする。

・明治7年1月11日（姉妹への手紙）

「土曜日に生徒を我家に招き、約35名程がやってきました。みんな優雅な刺しゅう入りの着物とさまざまな髪に結ってとても可愛いく見えました。彼女たちは私へのプレゼントに、青地と真紅のクレープちりめんをそれぞれ一枚ずつと、美しい刺しゅう入りのソファークッション、青地の絹と絹糸のセットを持ってきてくれました」。

・明治7年4月11日（日記）

「夕方、生徒たちを招待してもてなした。クラークが彼女たちに実体鏡をみせて喜ばせた。48人の生徒があつまった」。

・明治7年5月18日（日記）

「マレー教授は、私が帰国せず、日本にとどまることを強く望んでおられるが、私にはできない」。

・明治7年5月19日（日記）

「今日は一日中、日本にとどまることについて考えてみた。学校の規模が拡張される予定で、新しい校舎も建てられることになっている。そして生徒も全国からやってきて寄宿舎もできる。この学校と関連して、女子師範学校も開校される予定であり、多くのクラスができる。ここに私が働くことになり学校内に住んで1人か2人の助手もつくとのことだ。給料は増額され、待遇もよくなる。しかし私はこれらのすべてをあきらめねばならない。ウィリーがいなくては滞在できないし、2年間も故郷を離れているので、あと2年間の滞在要請に同意するには故郷がなつかしすぎる。もし弟が日本での滞在をのぼすのなら、喜んで私もこの仕事をひき受けたであろうが、故郷の家族とのきづなを切れたままにしておくには私はあまりにも家族と強く結ばれてしまっている。マレー教授と校長⁽³⁴⁾は、私が日本に滞在できないことを知って非常に失望した」。

・明治7年6月11日（日記）

「私たちは帰国の準備をしているが、毎日私は愛する生徒たち (dear little pupils) と別れなければならないことを残念に思っている」。

・明治7年6月16日（日記）

「約8名の生徒と午後をすごした。」

・明治7年6月17日（日記）

「今日、生徒の三橋と青木が聖書について話しを聞きたいといって訪ねてきた。青木に聖書をあげた。彼女は私の生徒の中で最も知性があり、思慮の深い生徒である。よねとキネ（阪本甲子）、間島、中村専などが訪ねてきた。女学校の校長はこれらの優秀な女生徒をアメリカと一緒に連れて留学させてほしいと強く望んでいる。しかし文部省がそれに賛成するかどうかは疑わしい」。

・明治7年6月22日（日記）

「ソエダが今日私に会いにきた」。

・明治7年6月30日（日記）

「二人の女生徒が訪ねてきた」。

・明治7年7月16日（日記）

「木曜日に全生徒と夕方を共に過した。みんながお別れのプレゼントを持ってきたが高価でエレガントなものや、高価ではないが美しいものなどがあつた。1～2時間を共に過したが、たくさん生徒が涙をみせて別れた」。

以上の抜き書きから、マギーと女学校をとりまく特徴をまとめると、①マギーと女生徒たちの人格的交流、②生きた理科教育（E. W. クラークは、明治天皇に欧米の写真をこの実体鏡でうつして見せたという）⁽³⁵⁾ ③女生徒への宗教的感化、④D. マレーがマギーの滞日延期と、あと2年間の女子教育への献身を要望したこと、⑤東京女学校に広く全国の女子に門戸を

開くため、寄宿舎を作る予定であったこと、などがあげられる。このうち寄宿舎設置については文部省第二年報にも校長が上申したことが記されているが、女子師範教育を根づかせ発展させることに努力した D. マレーが、その協力者としてマギーに意向を打診したことはマギーの日記によりはじめて明らかになった事実である。又、校長小杉が、女子の海外留学の実施を望んでいたらしいことも注目される。全般的にマギーの滞在期間の短さの割には、女生徒との交流が豊かであったことをマギーの日記は示している。

④ 通訳赤井よねとの交友

マギーが日記の中で最も頻繁に記している日本女性は、東京女学校の生徒であり通訳でもあった赤井よね(1855-1947)である。年長でもあり英語力もあるため、マギーの生徒というよりは、よき友人として扱っているようすが日記からわかる。以下、よねと弟の赤井雄についてふれてある手紙と日記の個所を抜書きする。

・明治5年10月2日(姉妹への手紙)

「私は今、毎日1時間、小さな生徒に英語を一カ月4ドルで教えています。これがこちらでの授業料の値段で日本人は貧しいので高くは払えません。ちょっとした仕事のつもりでひき受けました。彼は10才の頭のいい少年で赤井雄という名前です。彼の姉さんがミセス・ヴィーダーのクラスの生徒の一人なのです」。

以下はすべて日記よりの記述である。

・明治5年12月10日

「日曜日の午後、日曜学校を開きジェニー、ガシィー・ヴィーダー、ウィリー・フルベッキ、赤井よねとその弟などがきた」。

・明治6年11月29日

「赤井がきて夕食を共にした」。

・明治7年3月16日

「木曜日に上野へ赤井と一緒にいった。土曜日にも行った」。

・明治7年3月19日

「今日の午後、よねと絹を売っている店へ行った」。

・明治7年3月26日

「私の友だちであり助教 (assistant pupil) でもある赤井よねが大蔵省出仕の吉原氏と来週結婚する。彼女は彼に一度しか会っていないが、必要な準備はすべて仲人である彼女の叔父がやっている。彼女は父親が彼女を結婚相手の家につれていくまで、結婚相手の彼には会わないのだ」。

・明治7年4月8日

「赤井よねが日曜日夕方に結婚した」。

・明治7年4月15日

「月曜日にペシャイン・スミス（Peachey Smith）の家に夕食に招かれ、そこで吉原氏と花嫁、ウエノ夫妻及びハウスに会った」。

・明治7年4月18日

「昨日の午後は、よねの家で過した。彼女は外務省の反対側に住んでいて洋式と和風の客間があった。床の間には松の木と桃の花が飾ってあり両横には鶴と亀の置物があり、干魚と酒も置いてあった。花嫁がこの部屋に入ってきた時に彼女はこの床の間の前に座って三三九度をした。私はよねの家で1～2時間過したが、日本女性の結婚衣装をはじめ全部見せてもらった」。

以上が、赤井姉弟についての主な抜き書きである。マギーはよねとの交友によって日本の文化や慣習に対する観察のチャンスを得、又理解を深めていったことがわかる。なかでも日本の若い女性がいかなるプロセスを経て結婚に至るのか、お見合いから仲人の役割、結婚の儀式などは欧米の文化とは異質なものであるだけに、興味深げに詳細に記しているのが注目される。よねは、通訳であり友人であったが、同時に東京女学校の生徒であった。その意味では、マギーは、女生徒との親しい交流を通して日本文化を学んだといえるし、よねの果たした役割も大きかったといえるであろう。

なお、赤井よねの来歴について、諸文献及び、現存する親族⁽³⁶⁾からの聞き書きによってまとめると以下のようなになる。

赤井よねがマギーと知りあったのはよねが17才から19才にかけての時期であった。島本久恵氏によると、よねは「四国高松藩の代々漢学の家（漢学）の生まれ」⁽³⁷⁾とある。高松藩儒で江戸在住の赤井姓は赤井東海の名が天保7年（1836）の人名録⁽³⁸⁾や、嘉永3年（1850）の江戸文人芸園一覽⁽³⁹⁾に見出される。東海は儒学を以て終始したが、高野長英と相知り洋学を修め、杉田玄瑞、緒方洪庵、ヘボン等に学んだといわれる⁽⁴⁰⁾。

ちなみにマギーの日記に、よねと共にキネが訪れたことが出てくるが、この阪本^{キネ}甲子の父親である阪本政均（大審院判事）は赤井東海の次男であって長じて阪本家を嗣いでいる⁽⁴¹⁾。これらの諸事実から、よねの父親は、東海の長男（名前不詳）であることが推測され、マギーの日記に出てくる仲人で叔父というのが阪本政均であり、彼が吉原重俊を紹介したと推測される。吉原重俊は鹿児島藩士で米国留学（ニューブランズウィック、イェール）⁽⁴²⁾から明治6年に帰朝、大蔵大輔、日本銀行初代総裁を歴任した。

重俊病没後の明治21年に「吉原日本銀行総裁未亡人よね子、婦人雑誌発行計画」⁽⁴³⁾の新聞記事がみられるが、実際に発刊された形跡は確認できない。⁽⁴⁴⁾いずれにしろ、よねは、「物ごとに眼の高い、判断のはっきりした」⁽⁴⁵⁾女性に成長したという。

④ 女生徒青木琴と E.H. ハウスについて

マギーの日記に記されている女生徒の中で、その個性まで描写されているケースは珍らしいが、青木の場合、既にふれたように、聖書を与えたことや、知的で思考力のある生徒であるこ

と、そして校長の小杉恒太郎が、このような優秀な生徒を留学させたいと願っていることなどが記されている。学生としての留学は実現しなかったが、青木は、E. H. ハウスの養女となって明治13年に米国に渡っている。⁽⁴⁶⁾

ハウスがお雇い外国人教師として大学南校で英語を教えていた頃、グリフィス姉弟とは親しく交際していたことが知られており、マギーは彼を「魅力的な話しをする人」⁽⁴⁷⁾とか、「愛すべき人」⁽⁴⁸⁾と表現している。同じ頃のマギーの日記に、「私の生徒の一人である青木が明晩、結婚する予定である。彼女の結婚衣装は洋装である」⁽⁴⁹⁾と記されている。この結婚はうまくいかず、琴は苦悩の末、命を絶とうと決心したがその時に東京女学校で教えたことのあるハウスと再会して助けられ、以後、彼の養女になったといわれる⁽⁵⁰⁾。東京女学校が南校境内にあった明治5年の創立当初にハウスが女学校の講師をかねたといわれる⁽⁵¹⁾。

青木琴の書いた英文エッセイ *History of My Life* が、GCRUL に保存されており、それによると、尾張出身で維新後、新政府に出仕する父のもとに上京し、向学心に燃えていた頃父の友人から女学校の創設されることを聞き入学している。

「この女学校でミセスヴィーダーがとても親切にしてくれ嬉しかったが、昨年から彼女がこられなくて淋しかった。でもあなたがとてもやさしく教えてくれるので、今は幸せです」⁽⁵²⁾とも述べている。

琴の父、青木信虎は明治4年に新政府の司法中判事⁽⁵³⁾、同9年四等判事⁽⁵⁴⁾を経て同14年から函館控訴裁判所長⁽⁵⁵⁾となっている。

ハウスは、明治21年にボストンで“A Child of Japan or The Story of Yone Santo”と題した小説を発表したが、ヨネ・サントーは青木琴をモデルにしている。小説の中で主人公ヨネが東京女学校で受けた教育を次のように表現している。

「ヨネは最高の水準の官立女学校を卒業して珍しく高度な知性を身につけるに至った。しかし、無知から啓蒙への経緯には必ず大きな困難と苦しみが伴うことの生きたケースといえる。女学校で欧米の社会の進んだ状態について理論的に親しむようになる一方で、もはや彼女にふさわしくなくなった現実社会へ投げ帰されるため幸せになれない」⁽⁵⁶⁾

ハウスは続いて、主人公ヨネが封建的思想を持つ家族の中で女学校生活を続けていく上での苦闘を、概略、次のようにのべる。

「ヨネたち家族が父親の待つ東京へと東海道を上ってくる途中、ある温泉宿でアメリカ人チャーウエルという医者を知りあい、彼はこの利発な少女がどうい女性に成長するかを見守りたいと願う。上京後にヨネの父が温泉宿で世話になった礼にチャーウエルを訪問したことからつきあいが始まり、ヨネの家を訪ねて、彼女に、あんなに望んでいた学校はどうなっているのかと聞く。ヨネは知的好奇心が強いが同時に家族に対してやさしく従順であり、強い攘夷思想を持つ祖母の反対もあって、彼女の向学心を満足させる見通しの暗いことを彼は知る。そこで彼は、その頃開校したばかりの最高レベルの女学校の入学手続をしてやり、入学

許可証を携えてヨネを訪れる。あきらめかけていたヨネは、書類を見て顔色を変え、激しく震え、押さえ切れずにすすり泣く。父親は経費のことが頭をかすめるが、新時代への理解もあり喜びを示す。祖母と二人の叔母は喜ばない。ヨネが学校に入ると家計にひびき家事手伝いも十分させられないからだ。父親はヨネを愛していたから入学は実現する。しかし入学後も祖母の無理解は続き、女学校の教育費がかかるという理由で女中と下男をやめさせてしまうため、ヨネは早起して火の用意、朝食準備、水仕事、まき割りなどをやる。そのために学校は遅刻が多いが成績がよいのでとがめられない。過重な家事労働と家族の無理解の中に置かれて勉強だけが楽しみである14才のヨネは年上の生徒のいる中で抜群に優秀である。外国人教師がヨネのアカギレしてふくれ上っている手をみとがめるが彼女はその理由を述べないし、父親にも、祖母や叔母との不和を訴えない。それがこの国の伝統なのだ。西南戦争の影響で政府はこの女学校を廃校にし、やがて彼女は祖母から教養の低い船大工との結婚を迫られ、祖母の命令に従うことを義務と考えるヨネは、愛がなく専制的なサントー・ヨリキチと結婚する」。(57)

マギーのいう「私の生徒の中で最も知的で思考力のある生徒」の置かれた家族的背景や女学校のような、ヨネの心理状態などを、事実そのままではないであろうが、かなり具体的に知ることができる。このようにして、マギーとハウスという二人のお雇い外国人の残した資料は、明治啓蒙期の新旧女性観が混在する社会における知的好奇心に満ちた一人の東京女学校の生徒像を歴史の闇の中から浮かび上らせてくれたといえよう。

なお、琴は、ハウスと渡米してボストンで暮し、乗馬や油絵を学び、作家マーク・トウェン夫妻と親しく交際したという。(58)

ハウスと琴は明治26年、再度日本に帰ってきて、ハウスは宮内省雅楽部のオーケストラの指導に専念し、明治34年に病没している。マギーが聖書を与えた琴は、「宗教に関してはキリスト教には全然影響を受けなかった」(59) という証言があり、宣教師嫌いでも有名だったハウスの影響が考えられる。

(3) 母国へのマギーの活動（日本との関連で）

① “Little Kine” について

弟のウィリーが母国アメリカに日本紹介の記事を多く送ったのに対し、マギーが記事を書いて雑誌社に送ったのは、日記でみる限り、“Little Kine” の一篇のみである。明治7年9月25日（帰国直後）の日記に「“Little Kine” の原稿料15ドルを受けとった。これは1年程前に Young Folks, 現在は改名して St. Nicholas 誌となった雑誌に送ったものである」(60) との記述がみられ、さらに明治18年3月7日附の日記に、「“Little Kine” が St. Nicholas の3月号に美しいさし絵つきで掲載されている」(61) とのべている。投稿してから実に12年後に発表されたために、当時鹿鳴館期にあって、女子教育がミッション・スクールを中心に華々

しく展開していた我国の状況を正しく伝えているものではない。しかし、明治6年当時の開校1年目に入った東京女学校と女生徒の姿を知る上で、我々には貴重な資料である。

マギーの日記には、赤井よねのいこと推測できる阪本甲子が Little Kine と書かれてある。例えば、「Little Kine と中村専が昨日、教会にやってきて、私と一緒に昼食をした」⁽⁶²⁾（明治7年2月9日）の記述がある。マギーが投稿した雑誌は少年少女向けのものであり、彼女が、母国の同年齢の子どもたちに、日本の少女の成長していく様子や学校、家庭生活などを紹介しようと望んだのであろう。さし絵もアメリカ人が描いたもので不備をまぬがれない。阪本甲子をモデルとしたと考えられるこの一文は、ハウスの小説と並んで、アメリカで発表され、現在まで保存されていたため、GCRUL を補強する貴重な資料となって、我国の資料不足の穴を補ってくれている。

以下に“Little Kine”の内容を要約する。

「小さなキネの家は日本の江戸城の城壁とお堀の丁度外側にあり、彼女は11才位の小さな内気で気立てのよいかわいい少女である。彼女は日本語と英語による教育をうけていて忙しい。彼女は政府役人の娘で家族の第一子であるため父親の自慢の種でもある。彼女の年老いたお祖母ちゃんは孫娘に会うために讃岐という南の田舎から数百マイルの道を江戸へやってきてお七夜に名前がつけられるとき同席した。キネは百カ日を迎えるとお宮参りにつれて行かれるのだが、それは丁度、アメリカの家庭で親が赤ちゃんを教会に連れて行って洗礼を受けさせるのと似ている。もっともキネの両親は真なる神を知らないし崇拜もしていない。神主は一枚の紙に祈りの言葉を書きそれをお護り袋に入れる。このお護り袋は小さな赤いチリメンの布地に白い花の刺しゅうがあって絹のひもがついており、子供たちが悪霊、つまり狐にだまされるのを防いだり、危険から守る力を持っていると日本人は信じている。

6才になるとキネの教育がはじまる。まず、手習いの学校へ行く。そこでは他の子供たちと一緒に座ってペンやインクではなく筆と墨を用いる。手習いの他にキネは三味線を習う。三味線はギターに似ているが弦が三本しかない。毎日先生がキネの家に来て、キネやいこたちに歌と三味線を教える。日本人にとっては甘美な音楽であるが外国人の耳には非常に耳ざわりな音である。音楽のレッスンは終わると踊りを習う。キネはこれらの習い事が好きだ。日本舞踊はダンスとは非常に違って、スキップもジャンプもステップもない。踊り手はパントマイムのように腕と体をゆっくり優雅に動かし、踊りは物語や歴史を実演するのだ。時には面をかぶって犬や狐や他の動物を演じて登場人物にふさわしい衣装に変えるし、踊りはしばしば吟唱を伴う。

10才になってキネは正式に学校に入学し日本語と外国語で読み書きを学ぶようになる。彼女は朝おきると顔を洗うが髪を結う必要はない。髪結い屋が時々来て少女の年齢にふさわしい形に整えてくれるのだ。

着物を着終るとキネは素足か、寒い時にはくるぶしまでの白い足袋をはいて両親のところ

へ「おはよう」をいいにいく。そして小さなテーブルのまわりに座って皆で朝食をとる。それから教科書を絹チリメンの風呂敷に包み、油紙製のかさを持って下駄をはき、両親にお辞儀して教科書の包みを持った女中にお伴をさせて学校へ出かける。彼女はゆっくり歩く。というのは帯が強く締めてあるので自由がきかず、高の木製の覆物が動作をぎこちなくしている。石や木の橋の上をこの下駄でたくさんの少女が一勢に歩くときの音は、非常に独特で耳ざわりなものである。

学校につくと、キネは覆物をドアの外にぬいで部屋の中に入る。彼女はやわらかい白い足袋で清潔な畳の上を音をたてずに歩く。学校で日本人教師に三時間学び、そのあと英語の教師に三時間学ぶ。漢字を学んだり、歴史と地理の授業では日本語で朗唱している。これは静かな普通の調子で行われるのではなく、歌うような高い調子で大声を出すので外国人の耳には奇妙に聞こえる。

日本語の授業が終ると英語の読みとその和訳を三時間勉強する。算数はこれまでの日本の旧式の算数とは全くちがった外国式のことを学んでいる」。(63)

マギーは、宮参りの習慣をまず紹介し、6才で手習いのため寺子屋へ行くと述べているのは、キネが明治5年の女学校開校以前、つまり学制が施行される前に受けた教育がわかる。習い事に三味線や踊りをあげているが、女生徒の英文エッセイにも同じようなことが書かれている。又、東京女学校へはお伴つきで登校し、教室が畳式であったこと、歴史や地理の朗唱などにマギーは注目している。原文では家庭生活や自然観察などもっと詳しく書かれており、キネを中心的モデルにすえながら、マギーの日本の全般的観察からみた日本少女像であろう。

なお、阪本甲子は、明治15年に阪本鈺之助（永井久一郎の弟、福井県知事、枢密顧問官）を婿養子として結婚したが、明治35年3月病没した。(64)

② 日本のミッションスクールへの援助

マギーの日記には、既述のようにアメリカンミッションホームで教えるミス・クロスビー、ミセス・プリュイン、ミセス・ピアソンとは親しくつきあっており、マギーの精神的な憩いとなっているようである。横浜のミッションホーム訪問のことを「彼女たちはすばらしい家を持っており、16人の子供が楽しそうにしていた。校舎の中で祈りや歌を英語と日本語で行っていた。午後には校舎の中で日曜学校をしていた」(65) との日記がみられるが、帰国も迫った明治7年春には、この横浜のミッションホームへの援助を、母国フィラデルフィアのチェインバース教会ができるかどうかを、姉妹への手紙で打診し、「一カ月に10ドルあればミッションホームで一人の子供を育てることが出来ます」(66) と説明している。又、帰国後は、教員として奉職した Miss Judkin's School で生徒たちの作った料理による会食慈善事業を行い、横浜のフェリス女学校への援助がその目的の一つにあげられている。(67) さらに日本から訪れる客をグリフィス家では歓迎したことが、帰国後の日記により知られる。明治9年の建国百年期博覧会では田中不二麿夫妻や手島精一などをもてなしている。

— お わ り に —

マギーが、二年間という短い滞日期間にもかかわらず、日記と手紙及び生徒の作文を残してくれたおかげで、学制期直後の、しかも短命に終わった東京女学校の実像を復元するという困難な作業に一助となるような、生きた人間関係と交流の実態をかいま見せてくれた。彼女の教師としての力量や方法などはつかみ得なかったが、少なくとも女生徒を国籍を越えて愛し、優しく接した姿は明確に浮びあがったと考える。教師として学力アップに邁進した後任のライスとはこの点で好対照をなしているが、これはマギーとライスの教師としての個性の差異というよりも、東京女学校の制度上の変化と大きく関連していると思える。既述のように、マギーの教えた時期は、初等教育レベルに英語学を加えた学校であり、ライスの教えていた明治8年に教則改定があって、小学校科卒業の14才以上17才以下の中等教育機関となったのである。さらには、攘夷思想も完全には払拭されていない社会的情勢の中で小学生レベルの女兒がはじめてみる外国人に対して抱いたであろう不安感も考慮しなければならない。例えば、女生徒の一人である杉陽（杉亨二の娘）の英作文には、「ヴィーダー先生が外国人で、私は英語のABCも知らなかったのですごく心配した。一年後にあなたが教えてくださるようになり、みんなあなたがとても親切な人だといっている。アメリカへ帰ってしまわれるのが残念だ」⁽⁶⁸⁾とあり、マギーが、幼い日本の少女たちに国境を越えた人間的ふれあいと信頼を与えてくれたことがわかる。

いずれにしろ、文部省年報によって知られる制度的側面を外側とするなら、マギーの残した手紙、日記、雑誌投稿記事、及び女生徒の英文エッセイは、制度の内側に生きていた人間の出会いと交流、つまり維新から間もない時期の「国際交流」の実態をある程度、明らかにしてくれたといえよう。

註

- (1) 明治初期のお雇い外国婦人教師としては他に、開拓使仮学校女学校のオランダ人女教師、ロイトル Jaquelina Henrietta Angelique de Ruijter (明治5年6月～7年12月まで) 及び、ツワートル I. Ch. Toewater (明治5年6月～7年10月まで) がいる。(これら二名の来歴については石田純郎「ロイトルとツワートル——開拓使仮学校女学校の蘭人女教師——北海道開拓記念館友の会会報 No. 10, 昭和59.9.30にくわしい。)
- (2) Edward. R. Beauchamp, "An American Teacher in Early Meiji Japan, 1976, p. 82-83.
- (3) 金子忠史「グリフィスと日本 その一」, 京都大学教育学部紀要第12号, 昭和41年, p. 209.
- (4) E. Beauchamp, 同上, p. 98.
- (5) 最も代表的な研究は、青山なを「官立東京女学校の歴史的意味」(『明治女学校の研究』, 昭和47年, pp. 537-556 参照)

- (6) マギーは、明治7年6月、帰国の直前に生たちに書かせた英作文 History of My Life のことで、名前の確認できる者だけで30名余あり、GCRUL に所蔵されている。
- (7) 『資料御雇外国人』ユネスコ東アジア文化研究センター編、小学館、昭和50年、p. 264.
- (8) 「新聞雑誌」明治7年10月8日、『新聞集成明治編年史』第2巻、p. 216.
- (9) 『高橋是清自伝』(上)、中央公論社、昭和51年、p. 126.
- (10) “The Official Directory For The Year 1882”, p. 12.
- (11) 鳩山春子『自叙伝』(日本人の自伝 7) 平凡社、1981年、pp. 358-359.
- (12) Anna C. Wyckoff to W. E. G. October 26, 1919, GCRUL.
- (13) Rosemary F. Carroll, “Margaret Clark Griffis, Plantation Teacher”, Tennessee Historical Quarterly, No. 3, Fall 1967, pp. 295-303.
- (14) 同上、p. 296.
- (15) “A Guide to Manuscript Diaries and Journals in the Special Collections Department Rutgers University”, (Compiled by Donald A. Sinclair), p. 160-161.
- (16) MCG to Sisters, November 17, 1872, GCRUL.
- (17) MCG to Sisters, November 18, 1872, GCRUL.
- (18) MCG to Sisters, November 18, 1872, GCRUL.
- (19) MCG to Sisters, October 30, 1872, GCRUL.
- (20) MCG “Diary”, February 18, 1873, GCRUL.
- (21) 『資料御雇外国人』, p. 220.
- (22) MCG to Hettie, January 4, 1873, GCRUL.
- (23) MCG, “Diary”, March 23, 1873, GCRUL.
- (24) 『袖珍官員録』(明治5年刊)に、松隈尚澄(文部省九等出仕)の名がある。
- (25) MCG, “Diary”, March 27, 1873, GCRUL.
- (26) MCG, “Diary” October 5, 1873. GCRUL.
- (27) 木村匡、『森先生伝』, p. 77.
- (28) 近藤富枝、『鹿鳴館貴婦人考』, 講談社文庫, 昭和53, p. 55.
- (29) 畠山義成(開成学校初代校長)の変名。
- (30) MCG. “Diary”, November 29, 1873, GCRUL.
- (31) 15名の女生徒名; 上等の部—信田喜久, 青木コト, 三橋シホ, 津田恭仁, 本多セン, 下等の部—小林鋭, 日下部真千尾, 杉陽, 板倉種, 坂本甲子, 中村専, 間島幸, 中村文, 渋沢ウタ, 細野ユン(『新聞集成明治編年史』第二巻, p. 93.)
- (32) 碓井知鷗子「官立東京女学校の基礎的研究」——在学生の「生活史」の追跡調査——, 東海学園女子短大紀要第9号, 昭和59, pp. 1-17. 参照。
- (33) 蘆谷重常、『穂積歌子』昭和9年, p. 62.
- (34) 当時の校長は小杉恒太郎。
- (35) 山下英一、『グリフィスと福井』福井県郷土新書5, p. 191.
- (36) よねの直系の孫, 吉原重明氏及び, よねの次男, 吉原重時氏夫人, 吉原アイ氏。
- (37) 島本久恵, 『明治の女性たち』, みすず書房, 昭和41年, p. 245.
- (38) 森洗三他編『近世人名録集成』第二巻, 昭和51, p. 48.
- (39) 同上, p. 321.
- (40) 永井威三郎, 『風樹の年輪』, 昭和43年, p. 60.
- (41) 同上, p. 60.
- (42) 吉原重俊の直系の孫, 吉原重明氏によると, 重俊は、ニューズルンズウィックの他にイェールで学び、在籍名簿が実在するとのことである。

- (43) 『新聞集成明治編年史』第七巻, p. 78.
- (44) 当時発刊された「日本新婦人」(明21, 9月), 「君子と淑女」(同10月), 「文明の母」(同10月)には, いずれも吉原よねの名は見出されない。
- (45) 島本久恵, 前掲書, p. 245.
- (46) 「E. H. ハウス」, 『近代文学研究叢書』第五巻, 昭和32, p. 387.
- (47) MCG. “Diary”, February 18, 1873, GCRUL.
- (48) MCG. “Diary”, April 8, 1874, GCRUL.
- (49) MCG. “Diary”, March 5, 1874, GCRUL.
- (50) 「E. H. ハウス」前掲書, p. 387.
- (51) 同上, p. 392.
- (52) Student Essays, Koto Aoki, June 20, 1874, GCRUL.
- (53) 『明治5年官員全書』(壬申5月5日改)
- (54) 中島翠堂輯, 『官員鑑』(明治9年5月)
- (55) 『法曹百年史』昭和44年, p. 1186.
- (56) E. H. House, “A Child of Japan or The Story of Yone Santo,” London, p. 5.
- (57) 同上, pp. 6~70 の要約。
- (58) 黒田初子, 「明治の母」, 『母たちの世代』, 駿々堂, 昭和56年, p. 175.
- (59) 同上, p. 179.
- (60) MCG, “Diary”, September 25, 1874, GCRUL.
- (61) MCG. “Diary”, March 7, 1835, GCRUL.
- (62) MCG, “Diary”, February 9, 1874, GCRUL.
- (63) “Little Kine”, by Margaret C. Griffis, *St. Nicholas*, March issue, 1885, pp. 327-331.
- (64) 甲子の夫, 阪本鈺之助の直系の孫, 坂本武彦氏蔵の掛軸には甲子の畫像が描かれ, その側に, 「夫人少有才名入師範学校卒英語科業長而貞淑能治内明治35年3月17日病没才三十九」の文が記されている。
- (65) MCG, “Diary”, September 21, 1873, GCRUL.
- (66) MCG to Sisters, March 29, 1874, GCRUL.
- (67) MCG, “Diary”, April 17, 1887, GCRUL.
- (68) Student Essays, Yo Sugi, 1874, GCRUL.

〔付記〕

マーガレット・グリフィスの来日前の職業経歴などについては, ラトガース大学図書館のクラーク・ベック氏より文献を教示, かつ送付頂いたことを明記し, お礼申し上げます。